

平安前期物語の「爪弾き」

— 『落窪物語』を中心に —

'Filiping' in the early tales of the Heian period: centring on *The Tale of Ochikubo*

鈴木 貴子

SUZUKI Takako

【要旨】 継子いじめとして名高い『落窪物語』には、継母の荒々しい行為に、その激しい気性が表象されている。とりわけ、継母に用いられる「もみ手」と「手がらみ」は、他の平安文学作品には見られない『落窪物語』のみに描かれる特徴的な表現である。このような手の表現は、衣を縫うという落窪の君の手の動きが描かれることとも関連している。

さらに、繰り返し登場する手の表現に「爪弾（つまはじ）き」が挙げられる。「爪弾き」とは、「親指の腹に、人さし指または中指を当ててはじくこと。不満・嫌悪・排斥などの気持の時にするしぐさ」である。時に、魔除けを意味する動作としても描かれる。

平安文学作品において「爪弾き」の用例は、『落窪物語』に七例、「うつほ物語」に五例、「源氏物語」に四例、「土佐日記」、「蜻蛉日記」、「枕草子」、「夜の寝覚」、「狭衣物語」、「大鏡」、「宇治拾遺物語」に一例ずつ見出だせる。以上のことから、他の作品に比べ『落窪物語』には、「爪弾き」が数多く用いられていることが窺える。

『落窪物語』の先行研究には、徹底した現実主義を指摘した論をはじめ、「いじめ」の構造を説いた論、落窪の君の縫う行為の重要性に着目した論、飲酒に関する表現や結婚のありように注目した論など、さまざまになされている。そのような中、「爪弾き」に関しては身体表現の用語として位置づけられてきた。「爪弾き」は声に出さないのしりであり、相手に対する攻撃

を秘めている。そのしぐさは、注目するに足る人物の心の声を捉えた身体表現といえる。

本稿では、『落窪物語』の「爪弾き」を中心に考察する。そして、平安前期物語や『源氏物語』と比較することにより、『落窪物語』の「爪弾き」に秘められた独自のあり方を明らかにしていきたい。

はじめに

継子いじめとして名高い『落窪物語』には、継母の荒々しい行為に、その激しい気性が表象されている。落窪の君を物置のような部屋に幽閉する場面では、乱暴に追い立てる継母のようですが「衣の肩を引き立てて立ちたまへば」、「物も散らしながら、逃ぐるものからむるやうに」（巻之一〇二）と記述される¹。その傾向は、継母が道頼の復讐に遭う場面において顕著に見られるのである。

継母は、道頼を忌々しく思いながらも、自ら手を出すことができない。そのいらだちは、「もみ手」や「手がらみ」（巻之二一―二七九）という手の

しぐさにも窺える。⁽²⁾ とりわけ「もみ手」と「手がらみ」は、他の平安文学作品には見られない『落窪物語』のみに描かれる特徴的な表現である。このような手の表現は、衣を縫うという落窪の君の手の動きが描かれることとも関連している。

さらに、繰り返し登場する手の表現に「爪弾(つまはじ)き」が挙げられる。⁽³⁾ 「爪弾き」とは、「親指の腹に、人さし指または中指を当ててはじくこと。不満・嫌悪・排斥などの気持の時にするしぐさ」である。⁽⁴⁾ 時に、魔除けを意味する動作としても描かれる。⁽⁵⁾

平安文学作品において「爪弾き」の用例は、『落窪物語』に七例、『うつほ物語』に五例、『源氏物語』に四例、『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『枕草子』、『夜の寝覚』、『狭衣物語』、『大鏡』、『宇治拾遺物語』に一例ずつ見出される。⁽⁶⁾ 以上のことから、他の作品に比べ、『落窪物語』には、「爪弾き」が数多く用いられていることが窺える。

『落窪物語』の先行研究には、徹底した現実主義を指摘した論をはじめ、「いじめ」の構造を説いた論、落窪の君の縫う行為の重要性に着目した論、飲酒に関する表現や結婚のありように注目した論など、さまざまになされている。⁽⁷⁾ そのような中、「爪弾き」に関しては身体表現の用語として位置づけられてきた。⁽⁸⁾ 「爪弾き」は声に出さないのしりであり、相手に対する攻撃を秘めている。そのしぐさは、注目するに足る人物の心の声を捉えた身体表現といえる。

本稿では、『落窪物語』の「爪弾き」を中心に考察する。そして、平安前期物語や『源氏物語』と比較することにより、『落窪物語』の「爪弾き」に秘められた独自のありようを明らかにしていきたい。

一 『落窪物語』にみる中納言の「爪弾き」と「古い」

総数で七例ある『落窪物語』の「爪弾き」のうち、継子いじめの場面に見られる一例を除く六例が、継母に対する道頼の復讐に際して描かれる。「爪弾き」が用いられる人物の内わけは、中納言に三例、越前守に二例、帯刀に一例、中納言家の供人たちに一例とすべて男性に用いられる。中でも、年長者である中納言に最も多く描かれていることが読み取られ、興味深い。それでは、どのような場面に描かれているのだろうか。具体例を挙げて検討していきたい。

くはしく申したまひてければ、老いたまへるほどよりは、爪弾をいと力々しうしたまひて、「いといふかひなきことをもしたるかな。：」

(巻之一一〇〇)

中納言は、継母の巧妙な嘘を見破ることができない。落窪の君が帯刀と密通しているという継母の言葉に、中納言はいらだち、爪弾きをする。ここで、中納言が力強く爪弾きをするさまが、「老いたまへるほどよりは、爪弾をいと力々しうしたまひて」と記述されていることに注目したい。身分の低い帯刀と通じたという落窪の君に、自らの娘と思うだけに苦々しい思いを禁じ得ない中納言の姿が窺える。

物語は、中納言の「古い」を強調させた上で、指に力を込める「爪弾き」を取って描くことよって、噛み合わない身体としぐさを浮き彫りにしようとしたのではないか。そこには、継母を疑いもせず、ただ操られるがままに我が子を貶める発言を繰り返す中納言の愚かさ、滑稽さが象徴されているのである。

この後、中納言は落窪の君を幽閉するという継母の提案に賛同する。「古い」に加え、怒りに任せるように、自らの言葉に興奮していくよう

に言葉を連ねるようすは、「物なくれそ。しをり殺してよ」と、老いほけて、物のおぼえぬままにのたまへば（巻之一—一〇一）と描かれる。こうして、年齢を重ねた身体を凌ぐ力で行われる「爪弾き」を境に、中納言の発言はさらに過激なものへと変化するのである。讒言の成功を密かに喜ぶ継母とは対照的に、落窪の君は実の父から疎外され、心身ともに追い詰められることとなる。落窪の君の不幸が、より際立つ構造となっているものと考えられる。

また、中納言の「爪弾き」は落窪の君が道頼に引き取られ、幸せを得た後にも登場する。道頼は継母から数々の仕打ちを受けてきた落窪の君を思い、復讐を企てる。その一つが、継母の娘の四の君を自分の身代わりにして、面白の駒（兵部の少輔）と結婚させるというものであった。面白の駒は顔が白く馬面で、鼻が大きく滑稽な人物であり、皆から笑いにされていた。四の君の結婚相手が実は面白の駒であったことは、露頭において初めて明らかになる。一同は驚愕するが、同時に蔵人の少将を中心に盛大な笑いが湧き起こるのであり、面白の駒は身内からも笑いにされるのである。

北の方聞きて、さらに物もおぼえず、あきれ惑ふ。おとどは、「老いの上に、いみじき恥見つる世かな」と、爪弾をし、入りて居たまへり。
（巻之二—一六一）

面白の駒の登場に継母は呆れかえり、中納言は世間に恥をさらしたことに爪弾きする。この場面でも、中納言の「爪弾き」と「老い」がセットで用いられていることに注目したい。「老いの上に」との記述から、「老い」を自覚する中納言が追い打ちをかけられるように恥をさらすこととなった衝撃と嘆きが窺える。

だが、ここでの「爪弾き」には、「老い」を跳ね返していくような力強

さは影を潜め、むしろ中納言の身体に吸収され負荷となっていくありようが見て取られる。せめてもの爪弾きでわずかに抵抗しつつ、自らの無力感をかみしめる色合いが濃い。

このように、落窪の君に対して向けられていた中納言の「爪弾き」は、後に面白の駒が婿となってしまうことを嘆く中納言家の恥としての「爪弾き」へと、より深化する。我が子とはいえ落窪の君を疎外する側にいた中納言が、今度は他者から笑いにされ、傷つき、自らに対して爪弾きをするのであり、事態が深刻化しているようすが読み取られるのである。

道頼は反省のない継母を懲らしめるべく、復讐を企てようとする。三の君や四の君、継母が忍び清水詣に訪れる際、偶然にも忍び向かう道頼一行と時を同じくする道すがら、道頼の仕掛けた争いが車争いに発展する。そして寺での籠りの場所争い、帰路での口争いに続くのである。帰邸した継母から清水詣での顛末を聞いた中納言は嘆き、間接的に恥をかく。この場面にも、中納言の「爪弾き」と「老い」は描かれる。

中納言、「我は老い癡ひて、おぼえもなく成り行く。かの君は、ただ今、大臣になりぬべき勢ひなれば、いといたうしがたし。さべうこそあらめ。名だたしく、わが妻子どもとて、さる恥を見、笑はれけむことよ」とて、爪弾をして、また嘆きたまふ。
（巻之二—一七九）

清水詣での顛末が意図的な嫌がらせであったことを知るにつけても、怒りが募るばかりの継母は、「もまれたまへば」（巻之二—一七九）と、自然ともみ手をしてしまい、中納言に報復したい思いを吐き出す。だが中納言は、「老い」に伴い周囲からの信頼もなくなっていく自分に対し、若く大臣にもなりそうな威勢の道頼に仕返しをすることは難しいとの認識を語る。その結果として、自らの不運と世間の評判を憂い、恥をかき笑

われる身の上であることを嘆くのである。

ここに、権勢を誇る道頼に対し、落ちぶれていく一方の立場にある自己を客観視できる中納言の冷静なまなざしが読み取られる。この中納言の「爪弾き」には、怒りをぶつける矛先を失った悲嘆が象徴されているのではないか。このように、中納言に用いられる「爪弾き」は、共通して「古い」の語とセットになって描かれるのである。

次に、複数の人物による「爪弾き」を考察しておきたい。道頼の容赦ない復讐は続き、継母をはじめ中納言家にさらなる追い打ちをかける。賀茂祭の見物の車争いでは典葉助が徴せられるのみならず、継母一行の車が壊され、人々から笑いの対象とされるのである。そのような中、継母一行の供人たちによる「爪弾き」は描かれる。

北の方よりはじめて、乗りたる人、「物も見じ。帰りなむ」、牛かけて、うちはやして、追ひ惑ひて帰れば、いさかひしけるほどに、一の車のとこしぱりを、ふつつと切りてければ、大路なかに、はくと引き落とし。下藪の（物見む）とわななき騒ぎ笑ふこと限りなし。車の男ども、足をそらにて、惑ひ倒れて、えふともかかげず。「出でたまふまじきにやありけむ」「かくいみじき恥の限りを見ること」と、爪弾をしつつ惑ふ。乗りたる人の心地、ただ思ひやらむ。皆泣きにけり。

（卷之二一〇七）

見物から引き上げようとした継母一行だが、大路の中央で車の屋形を落とすという非常事態に見舞われる。それも、継母たちの乗る車の屋形と車軸とを結び付ける縄を切り離しておいた、復讐の一つであった。身分の卑しい人たちが大騒ぎをして笑うように、継母一行の車の供人たちは爪弾きをし、とまどい迷う。

継母の娘をはじめ車にいた人たちは皆泣き、落とされた車の屋形の中

に這い上がった継母も肘をつき損ない、大声で泣く。継母は娘たちによって静かにするよう制せられ、もはや体裁を繕うことすら困難な状況に立たされたありようが窺える。

物語は爪弾きをする人物として、供人たちを新たに登場させることで、中納言家に仕える下層の人々の悲哀をも描き出そうとしたのではないか。継母一行が人々から笑われれば笑われるほどに、中納言家に仕える人々もまた笑いの対象となり、肩身の狭さを痛感する。供人たちは、このような主人を持った恥ずかしさを思い知り、爪弾きをするのである。衰退の一途を辿る中納言家の数々の問題が、一家を支える周縁の人々にまで影響を及ぼしているさまが読み取られるといえよう。

こうして、継母をむやみに信じた中納言は間接的に恥をかくことにより、愚かさや弱々しさを露呈する。その波紋はやがて、中納言家全体を取り巻く問題へと拡大していくのである。面白の駒を迎えるに至った時点ではまだ、中納言によって辛うじて世間体は保たれていたと考えられる。面白の駒が世間の笑い者であろうと、四の君が面白の駒のような者にまで見捨てられたなどと噂されることを恐れた中納言は、面白の駒を婿として受け止めようとする。娘の不幸よりも世間体の方を優先してしまふ中納言の姿には、全ては前世の因縁によるものとする当時の思考のありようが映し出されるのである。

中納言の最初の「爪弾き」は、継母の言葉信じた上での、身分の低い男との密通という容認できない男女関係への怒りの表明であった。ところが、物語の展開に伴い、世間から笑われる恥に対して用いられる自嘲的なしぐさへと変化していく。中納言家の内部崩壊は、道頼の復讐により爪弾きの場面が繰り返されていくことで加速していく。道行く身分の卑しい見物の庶民からの視線が決定打となり、屋形を繋いでいた縄を

断たれた継母一行の車もろとも崩壊に至るのだといえよう。

二 『落窪物語』の「爪弾き」にみる母への抗議

継母の言葉を鵜呑みにしていた中納言とは対照的に、実の母の発言に対しても異議を唱える人物に、帯刀が挙げられる。蔵人の少将の家来である帯刀は、道頼の乳兄弟であり、あこぎの結婚相手でもあった。あこぎは三の君に仕えながらも落窪の君に味方していた人物である。

帯刀の母は道頼の乳母であり、道頼から右大臣の姫君との縁談を断るよう依頼されていた。にもかかわらず、道頼の将来によかれと思いい、勝手に縁談を押し進めていたのであった。その事実が明らかになる場面において、帯刀の「爪弾き」は描かれる。

いと頼もしげなるけしきにて立ちたまふめるを、帯刀つくづくと聞きて、爪弾をはたはたとして、「なでふ、かかること申したまふ。君と申しながらも、(恥づかしげにおはす)とは見たてまつらずや。ただ今の御仲は、人放ちげにもあらぬものを。…」

(巻之二—一九一)

乳母は道頼に、かつて落窪の間に押し込められていた落窪の君を大切にするのは不思議であると言う。そして、父母が健在で大事にされている娘と結婚する方が望ましいと主張するのである。落窪の君を軽んじるような乳母の発言に、道頼は興奮のあまり顔を赤くしながら反論し、情けないと苦言を呈する。帯刀は二人のやりとりにも、爪弾きをばちばちとすること、母への非難を露わにするのである。

帯刀は爪弾きをした後、母の意見を真つ向から否定する。そして、養い君である道頼の出世に利益を得ようとするのかと問い、罪深く情けな

い旨を切々と説く。乳母としては、全ては道頼の将来を案じるがゆえの発言であった。とはいえ、幼い頃から馴れ親しむ乳母に、愛する女君の存在を認めてもらえない道頼の辛さは計り知れない。帯刀は道頼の心の傷を思いやると同時に、貶められた落窪の君の尊厳までをも守ろうとするかのように憤る。帯刀の「爪弾き」は道頼に加勢し、目先の利益を重視しようとする母を糾弾するのである。

帯刀は道頼やあこぎを通して、決して温かな心を失うことのなかった落窪の君の人となりをよく聞き知っていた。そうであるがゆえに、帯刀の「爪弾き」は道頼の内面を代弁するようになされる。そして、そのしぐさに端を発した菌に衣着せぬ発言は、道頼との揺るぎない絆をより鮮明に読者に知らしめるものとして作用するのである。まさに、道頼との厚い信頼に裏打ちされた、忠誠を貫く意思表示といえよう。結果として、道頼と右大臣の姫君との縁談は中止となる。帯刀の「爪弾き」は、道頼の危機を救う役割をも果たしているのだと考えられる。

一方、子が親の過ちを指摘する場面に描かれる「爪弾き」には、中納言家の継母腹の長子、越前守の用例が挙げられる。任国ばかりにいた越前守は、継子いじめの実態を知らずにいた。当時の三郎君は、継母が落窪の君に今までいかに過酷ないじめをしてきたか、越前守に語るのである。

「いかばかりか、うたてありしこと」とて、かたはしよりつぶつぶと語りて、「いかにあこぎなど言ひつらむ。見えたてまつらむにつけてこそ、恥づかしけれ」と言へば、越前守、爪弾をして、「あないみじ。おのれは国にのみ侍りて知らざりけり。あさましきわざをこそはしたまひけれ。この衛門督は、思ひ置きたまひて、かく恥を見するやうにはしたまふなりけり。我らをいかに見たまふらむ。す

べて交じらひもせずやあらまし」と恥ぢ惑へば、(卷之三―二二六) 三郎君は幼い頃、継母に虐げられる落窪の君のことを気の毒に思い、落窪の君を助けようとするあこぎの依頼を快く引き受けていた。継母の数々の仕打ちを間近で見えた三郎君は、いわばいじめの生き証人である。弟の三郎君からそれを聞かされた越前守は、衛門督(道頼)という権力者の恨みを買っても仕方ない母のふるまいへの嫌悪を露わにし、爪弾きをする。

継母は、こうして身内からも爪弾きをされるに至るのである。三郎君の話を通して母へのいらだちを募らせる越前守は、かつて中納言が継母の言葉に落窪の君への違和感を募らせていたことと類似する。また、乳母と道頼の言葉に、乳母である母へのいらだちを覚えた帯刀のありようとも似通うのである。

このように、「爪弾き」は他者に見せる行為という点で共通していることがわかる。物語は、権力者に擦り寄ろうとする人物を描き出すのである。また、越前守には「爪弾き」の用例がもう一例見られる。

北の方、この家はいと惜しかりつるに、いとうれしくのたまへど、
なほ(我はと、領じかへらるると見る)と思ふに、いとねたければ、
「落窪の君のかくしたまふか。いであなうれしのことや」と言ふに、
越前守、ただ腹立ちに腹立ちて、爪弾きをして、「現心にはおはせぬか。
ささぎさきいとほしく恥づかしきことのありけるに、面痛き心地す。
人の言ふべきことか。まろらを(いたづらになしたまはむ)とや。(も
のし)と思しけるほどは、いかばかりの恥をか見、懲ぜられたまひ
し。ひさかへて、かくねんごろに顧みたまふ御徳をだに、かつ見で、
かくのたまふ。」

(卷之四―二九三)

落窪の君からあり余るほどの温情を受けてもなお、懲りることなく皮肉

を言う継母に、越前守はひどく立腹し、爪弾きをする。この場面での越前守の「爪弾き」は、継母と直接話しをする中で生じた感情の発露としてのしぐさである。そこには、改心の見られない継母の強情なさまに、実の子からも困ったものと扱われ、孤立していく姿が浮き彫りとなる。

権力者に身を寄せたいところがある越前守は、継母の一貫した怒りの態度に、いらだちを隠せない。権力者にどのように擦り寄るか、擦り寄らないかということは、中納言家の今後を左右する重要な事柄である。「ただ腹立ちに腹立ちて」との記述からは、身内であるがゆえに余計に腹を立てる越前守のようすが窺える。自分自身にも被害が及ぶ問題であり、継母の現状を過敏に受け止める越前守の姿勢が読み取られよう。

権力者に追従する子どもたちに対し、継母の貫き方は継母ならではの感情で一貫している。権力など関係ないとする感情的な継母は、決してぶれることはない。外側の男たちの論理に回収されることのない継母の存在こそ、重要といえるのではないか。

以上のことから、『落窪物語』における「爪弾き」は、全て男性に用いられる点で共通している。継母が落窪の君を排除しようともくろみ、中納言に嘘を吹き込むことから始発する「爪弾き」は、ついに継母のもとに帰結することとなる。物語は、最後に「爪弾き」の対象となる人物が継母となるよう、意図的に配置したのだと考えられる。

こうして、落窪の君を陥れようとした継母が、ついには実の子どもたちからもいらだたれ、疎まれていくありようが描かれる。『落窪物語』は、選り抜かれた場面に用いられる「爪弾き」を通して、一筋縄ではいかないう家族、夫婦の関係を照らし出そうとしたのだといえよう。

三 『うつほ物語』にみる「笑い」と「爪弾き」

次に、同時代の作品である『うつほ物語』に総数で五例見られる「爪弾き」を考察しておきたい。「爪弾き」が用いられる人物の内わけは、徳町、三春高基、藤原季英、源正頼、民部卿（実正）に一例ずつとなる。中でも、三奇人の一人である三春高基と、妻の徳町が夫婦それぞれに用いられているところは、興味深い。それでは、どのような場面に描かれているのだろうか。

三春高基の吝嗇を意識した過剰な生活ぶりは人々から陰口を言われ、笑いの対象とされる始末であった。だが、高基は世間の悪評を気にも留めない。政務の面では非常に優れていたことから大臣にまで昇進し、裕福な商いの女の徳町を妻に迎えることとなる。

高基は、粗末な車や装束で出歩き、小さな女の童ばかりを使っていた。そのような夫に対し、常識のある徳町は、新たに使用人を雇うよう進言する。その提案を受け入れ雇ってみたものの、使用人から昼食におかずがなかったとの不満を告げられる。すると高基は、出費がかさみ、かえって大きな損をしてしまったと憂い、放心するのである。夫の愚かさに呆れた徳町は、哀れみとともに非難の思いを込め、笑いながら爪弾きをする。

「くちをしう、物の費えあることを数ふれば、多くの損なり。悔しく、人の言を聞きて、わが世に知らぬ言を聞くこと」とのたまふ。徳町、いとほしきこと限りなし。おとど、「男ども、酒買ひて、肴請ふぞや。かけて聞けば、心地こそ惑へ」。市女、うち笑ひて、爪弾きをして聞こゆ。
(藤原の君―八七)

『うつほ物語』において女性に用いられる唯一の用例であると同時に、

最初に登場する「爪弾き」である点も特徴的である。また、「爪弾き」が「笑い」とともに描かれているところに注目したい。

徳町は商人で、はるかに下層な人物である。にもかかわらず富裕で、自分の実力に自信を持っている。この場面での「笑い」は、冷やかな皮肉を込めた軽蔑の表情ともいえる、憤りや嘲りといった感情を抑制すべく辛うじて作り出された型としての「笑い」といえるのではないか。そして、言語化することを放棄しながらも完全には抑制できずに燻る内面のいらだちが、「笑い」の直後に描かれる「爪弾き」に表出されたものと考えられる。「笑い」と化すことのできなかった、忍耐の限度を越えた夫へのいらだちを静めるべく「爪弾き」は描かれるのである。高基が身内であるからこそこのいらだちといえよう。

人々の「笑い」の対象である高基は、妻となった徳町の現実的な提案も排除することで愛想を尽かされる。そして、さらに笑われる存在となるのである。過剰な吝嗇の道を究める高基は、かくして源正頼の娘のあて宮との結婚を望む人物へと変貌を遂げていく。

あて宮を望む場面に、高基の「爪弾き」は描かれる。
あて宮は、ただ今、春宮に、切に聞こえ給ふを、「いかかはせまし」となむ思ほしわづらふ」とぞのたまはせし。おとど、爪弾きをして、「幸ひなき君にもいますがなるかな。その坊の君は、いかにいますなる君ぞ。…」
(祭の使―二四)

高基は、あて宮付きの女房である宮内の君を招き、あて宮を望み、そこで初めて東宮があて宮に求婚していることを知る。そして爪弾きをした後で、東宮の悪口を言うのである。あて宮への思いから東宮に競争心を抱き、不快感を露わにするその言動は、自己中心的なありようを際立たせる。身分の低い妻に笑われ、爪弾きされた高基が分不相応にも、あて

宮を所望することの滑稽さが読み取られよう。⁽⁹⁾

このようにあて宮に関連した「爪弾き」は、この他に源正頼と民部卿（実正）の用例に見られる。二例とも、東宮の寵愛を一身に受ける藤壺（あて宮）に嫉妬するがゆえの東宮の妃の発言を、身内の男性が苦々しく思うしぐさに用いられるのである。⁽¹⁰⁾

次に、徳町と同様に、不条理な現実には鬱憤を募らせる「爪弾き」を考察していきたい。藤原季英は実力がありながらも後見がない為に、不遇な日々を余儀なくされていた。ある時、季英は学者たちの詩作に加わるべく、破れた衣に冠、後ろの方が擦りきれた草履というひどい身なりのまま、皆の列に入り込む。末の者にまで大笑いされながらも、忠遠の諫めに救われ、詩作に臨むのである。結果として、季英の詩は読まれず仕舞いにされるが、それでも自分の詩を声振り立て読誦していると、美しくよく通る声が正頼の耳に留まる。そしてついに苦学が報われ、見出だされるに至るのである。

博士たちは、高い能力を備えながらも後見のない季英を長きにわたる意図的に蔑ろしてきた。ところが、正頼から季英を登用しなかった理由を問われると、博士たちは季英の実力は認めていたとした上で、性格に要因があったとする趣旨の偽りの返答をする。適当な理由を連ねる博士たちに、季英は悔しさや怒りを込め、爪弾きをするのである。

「季英、まことに悟り侍る者なり。されど、しが魂定まらずして、朝廷に仕うまつるべくもあらず。これまかり出でたらば、公私妨げとあるべきによりて、えせず侍るなり」と申す。季英、爪を弾き、天を仰ぎて候ふ。
(祭の使―二三二)

不条理な現実には耐え抜いた月日が、季英の渾身の思いとともに「爪弾き」となって表出されるのだと考えられる。そして、季英の言い尽くせぬ思

いを汲んだ忠遠が、正頼に勸学院の内部の腐敗（任官登用の実態）を進言するのである。

季英の努力が報われるまでには長い時間を要した。権力の中枢にいる人物は、季英の学才を知りながらも笑うことで疎外し、保身に回る。それは、真に優秀な人物の登用によって今ある秩序を解体されまいと身構えるがゆえの行為であった。周囲の攻撃的な「笑い」や偽りの言葉に屈することのなかった季英は、反論する代わりに爪弾きをすることによって、辛うじて耐え忍んだのだと考えられる。

周囲に迎合することのない季英は、不遇の日々を貫く辛抱強さに特徴づけられる。その辛抱強い季英が敢えてした「爪弾き」は、声を振り立て、自作の詩を読誦し抜く姿と通底するものがあるのではないか。そこには、己の閉じた世界を、話し言葉以外の手段を用いて発信していくありようが窺えるのだ。不遇の中に描かれる季英の「爪弾き」には、社会の中で陽の目を見ない人物のありようが象徴されている。社会の矛盾に押し潰されそうになりながら、頭を挙げていく姿勢がくつきりと刻印されているのだといえる。

以上のことから、『うつほ物語』の「爪弾き」は、身分が低い人や奇人変人、風変わりな学者に用いられていることがわかる。そこには共通して社会に認めてもらいたいと願いながらも認められない思いを抱えた、個性的な人物に焦点が当てられ、そのような極端な存在を笑いながら共感をこめて描き出そうとする姿勢が見える。

『うつほ物語』は、それぞれの階層の人がそれぞれの思いから政治のあり方を正そうとするその憤懣を描き出す。そして、不遇に対する「爪弾き」は、あて宮に吸収されていくのである。

四 『源氏物語』にみる「爪弾き」

『源氏物語』に総数で四例見られる「爪弾き」は、『落窪物語』と同様に全て男性に描かれる。そして『源氏物語』の用例のうち、「笑い」の後に描かれる一例を除く全てが、思いがけない事態に腹立たしさを募らせる男性のしぐさに用いられる点で共通している¹¹⁾。中でも、三例のうち二例が光源氏に用いられているところは、興味深い。

それでは、どのような場面に描かれているのだろうか。『源氏物語』に見られる、女性の行動に腹を立てる男性の「爪弾き」を、具体例を挙げながら考察していきたい。

空蟬との逢瀬を忘れられない光源氏は、空蟬の弟である小君を介し、再び空蟬のもとへと忍び入る。だが、人のけはいに気付いた空蟬は単衣だけを身に纏い、すべるようにその場を逃れ出る。結局、光源氏は心ならずもその場に寝ていた軒端萩と一夜をともにする。そして翌朝、空蟬が残っていた薄衣を手に取り、部屋を出るのである。

小君、御車のしりにて、二条院におはしましぬ。ありさまのたまひて、「幼かりけり」とあはめたまひて、かの人の心を爪はじきをしつつ恨みたまふ。
(空蟬一—二二八)

二条院に到着した光源氏は、小君の計画が幼稚であったことを責め、素早く逃れ出た空蟬の心を恨み、爪弾きする。空蟬のつれない行動による想定外の事態であったにもかかわらず、小君に苦言を呈し責任転嫁していく、大人げない光源氏のような垣間見られるのである。

光源氏の「爪弾き」には、自分を拒む女性の心強さが引き起こした、思いも寄らぬ結果を受け止めきれない内面のいらだちが表出されているのだと考えられる。その結果、手に入れることのできなかつた空蟬の存

在と引き換えに、彼女の残した衣を手に入れるのである¹²⁾。

また、もう一例見られる光源氏の「爪弾き」は、柏木と女三の宮の密通を知るといふ、物語において非常に重要な場面に描かれる。

〈女御、更衣といへど、とある筋かかると方につけてかたほなる人もあり、心ばせかならず重からぬうちまじりて、思はずなることもあれど、おぼろけの定かなる過ち見えぬほどは、さてもまじらふやうもあらむに、ふとしもあらはならぬ紛れありぬべし、かくばかりまたなきさまにもてなしきこえて、内々の心ざし引く方よりも、いくしくかたじけなきものに思ひはぐくまむ人をおきて、かかるとはさらにたぐひあらじ〉と爪はじきせられたまふ。
(若菜下四—二五四)

柏木が女三の宮に送った手紙を発見した光源氏は、密通の事実を知る。そして、人目につかないところで何度も手紙を読み返しては、女三の宮に寄せる柏木の思いに心打たれながらも、思案に暮れるのである。柏木ほどの人物が思慮に欠けた、あからさまな手紙を記したことを蔑むと同時に、光源氏は密通の結果の女三の宮の懐妊であることを思い知らされる。そして、一人やり場のない思いに駆られるのである。

〈内にあるように、光源氏の極めて長い心内語が記述された直後に、「爪弾き」が描かれている点も示唆的である。光源氏が思いを巡らせた後のしぐさである「爪弾き」には、柏木と女三の宮に対する心外な思いとiraだちが巣くっている。濁流のように押し寄せる感情の荒波に、じっと耐えることを余儀なくされた光源氏の鬱屈とした思いが込められているのではないか。

だが一方で、柏木と女三の宮の許されない関係は、かつての自分を彷彿とさせる因果応報ともいえる出来事であった。藤壺との密通の末に、

子までなした罪を抱えながら生きてきた光源氏は、二人の密通の証拠を突き付けられ、改めて自分の罪深さを自覚させられ、たじろぐしかない。「爪弾き」というしぐさは、平静を装う光源氏にとって、言葉にならない思いの表明であり自らに立ち戻る思いの確認であった。物語は光源氏の長い心内語を締めくくるべく、あえて「爪弾き」を描き出す。それは同時に、黙っていることがもたらした険しい人生の始まりを告げるものとして作用するのである。

これまで検討してきた側では必ず、爪弾きをする人物を見ている人が描かれていた。他に及ぼす効果が重要であったのである。しかし、『源氏物語』のこの場面では誰も見ていないところで、爪弾きをせざるを得ない光源氏の姿が映し出される。光源氏は柏木を非難しようとしているのではなく、悔しい思いが「爪弾き」というしぐさとなって表れたのだと考えられる。ここに、傷つけられた体面を一人で受け止める光源氏の孤独が浮き彫りとなる。

このように、光源氏の「爪弾き」は想定外の出来事に際し登場し、密通と関わるように描かれる点で共通している。また、自分のもとから逃れ出た空蟬は、彼女の残した衣とともに芯の強い女性として光源氏の脳裏に刻まれる。そして、柏木と女三の宮の密通の事実は、光源氏の生涯に陰を落とし続けるのである。「爪弾き」によって鬱憤が晴れるどころか、むしろそのしぐさを境に自虐的な鬱屈に捉え続けられていく光源氏の姿が読み取られるのだといえよう。

次に、男性に描かれるもう一例の「爪弾き」を考察しておきたい。鬚黒は玉鬘のもとを訪れるべく用意を調べていた。ところが、鬚黒の北の方によって突然、鬚黒は火取の灰を浴びせかけられるのである。北の方は、もののけの為に病みやつれていたのであった。とはいえ、その常軌

を逸した行動に鬚黒は気味の悪さを募らせ、爪弾きをする。

心違ひとはいひながら、なほめづらしう見知らぬ人の御ありさまなりやと爪はじきせられ、疎ましうなりて、あはれと思ひつる心も残りねど、
(真木柱二二六六)

火取の灰によって全身が灰だらけとなり、玉鬘へのはやる思いをくじかれた鬚黒は、つい先ほどまで感じていた北の方へのいじらしさも消え失せる心地がする。鬚黒に降りかかる灰は北の方の未練や執念をのせるように目や鼻にも入り込み、鬚黒の心を縛るのだと考えられる。

この鬚黒の用例は、想定外の出来事や女性との関係に際し使われている点で、光源氏の「爪弾き」と同様といえる。このように、思い通りに物事が運ばない事態へのいらだちが「爪弾き」に伴い、衣、手紙、灰というモノを通して描かれているところも特徴的である。自分が手にする、もしくは身体に降りかかるモノの存在は、「爪弾き」をする人物に払ってもし払い切れない悶々とした思いを抱かせるのである。

以上のことから、『源氏物語』の「爪弾き」は、男女の関係を軸に描かれていることが明らかとなる。これは継子いじめを主題とした『落窪物語』の親子関係に起因する「爪弾き」とは異なり、より複雑に絡み合った、公にはできない問題を抱え持つ人々のありようを提示しているのだといえよう。

おわりに

稿を閉じるにあたり、『落窪物語』に描かれる継母の「手を打つ」しぐさに関して触れておきたい。中納言は落窪の君の亡き母が所有していた三条邸を修復し、御殿を造営した。そのことを耳にした道頼は、中納言

が引つ越しをする前に急遽、三条邸への引つ越しを行う。というのも、肝心の地券は落窪の君が所持していたからであった。その為、地券のない中納言はなす術もない。中納言は、せめて既に三条邸に運び込んだ荷物調度だけでも戻して欲しいとの使いを遣るものの、邸にすら入れてもらえない。そのような状況であることを知った継母は、「手を打ち、ねたがる」(巻之三十二二八)と手を打って悔しがるのである。¹³⁾

感情を曝け出す継母のありようは、絶望し、抜け殻と化した中納言が、ぼんやりと空を見上げるようすとは対照的である。継母の「手を打つ」しぐさには、怒りに震える継母の躍動感溢れる身体が体現されている。この後に、道頼の妻が落窪の君であったことが明かされていることから、継母の怒りが頂点に達した瞬間を捉えたしぐさといえよう。

「爪弾き」は片手で行われるものである。一方「手を打つ」しぐさは、両手に込められた渾身の力の衝突によって生じる音を捉えたものである。このように、より大胆な身体表現が一例のみ描かれていることから、継母の最大級の怒りが表象されているのだと考えられる。

言葉と沈黙のあわいに突如として出現する「爪弾き」は、リズムミカルな音とともに私たち読者の想像力に働きかけ、聴覚を刺激する。同時に、人物の苦々しい表情をも想起させるのであり、そこには文字という媒体を越えた、臨場感溢れるテキストが立ち現れるのだと考えられる。物語は、感情の高揚の発露である「爪弾き」という瞬時の動作を捉えることで、場面をより立体的に描き出そうとしたのではないか。

『落窪物語』において深刻な中にもどこかコミカルな要素を併せ持つ「爪弾き」は、落窪の君を疎外しようとする継母本人が、最終的に孤立していくさまを浮き彫りにする。翻って『源氏物語』では、思うに任せぬ男女関係の機微を映し出すものとして描かれるのである。¹⁴⁾このよ

うに、物語は選り抜かれた場面に「爪弾き」のしぐさを効果的に配置することで、人物の言葉にならない感情を丁寧な挿入と取り戻したのだといえよう。

*本文は、新編日本古典文学全集『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『落窪物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『夜の寝覚』、『狭衣物語』、『大鏡』、『宇治拾遺物語』(小学館)による。

また、『うつほ物語』の本文は、室城秀之『うつほ物語 全』(おうふう一九九五年初版 二〇〇一年改訂)による。

註

(1) 感情を露わにする継母とは対照的に、あこぎは気持ちを切り替え、冷静に対処しようとする。そのさまは、「目くるる心地して、足ずりして泣かる心地を、思ひ静めて、うち散らしたまへる物ども、取りしたたむ」(巻之一一〇三)と記述される。また、あこぎは落窪の君が幽閉された部屋を訪れる際、人が寝静まった頃を見計らった上で、衣などを脱ぎ、袴を引き上げ行動する。衣ずれの音など、人に気付かれぬよう細心の注意を払い、行動するあこぎのようすが窺える。

(2) 三の君の婚であった蔵人の少将が、道頼の妹の中の君と結婚したとの噂を聞いた継母はいらだち、死ぬほどに思い悩む。そして、今までの嫌がらせは、道頼が妹と蔵人の少将を結婚させる為のものであり、面白の駒もわざと押しつけたのだと判断する。この場面に、生き霊になって取り憑いてやりたいと悔しがり、「手がらみ」をする継母が描かれる。

(3) 撥ではなく、音を立てずに爪で弾く「爪弾(つまび)き」は除く。

(4) 岩波『古語辞典』。

(5) しぐさによるまじないとしては、「指切りげんまん」と唱えながら互いに小指と小指を絡ませ合い、約束を交わす「指切り」がある。また、自らの身を守るしぐさに、中指を人さし指に絡ませる、「エンガチヨ」がある。これらは、子ども

の遊びなどに見られる。現状維持の為に予め災厄を防いだり、既に身に降りかかってしまった災厄を取り除く為に、除災のまじないなどが行われる。まじないに関しては、『図解案内 日本の民族』福田アジオ・内山大介・小林光一郎・鈴木英恵・萩谷良太・吉村風 編（吉川弘文館 二〇二二年一月）。

また、爪に関しては、「夜、爪を切つてはいけない」という禁忌がある。これは、もし夜に爪を切れば、「親の死に目に会えない」という俗信である。柳田国男は、俗信が重要な意味を持つことに注目し、昔の人が何をもって幸福と感じていたかを明らかにしようとする。

『大鏡』では、殺生戒を破った出来事に感銘を受けた重木が罪を得ることだと言い、爪弾きをする場面が「弾指はたはたとす」（『道長（雑々物語）』一三七四）と描かれる。ここでは、禍を除く為のまじないとして用いられる。『大鏡』の「爪弾き」に関する考察は、鈴木貴子『『大鏡』の鼻をかむ語り手たち』『栄花物語』の涙と比較して」（『日本女子大学 紀要』人間社会学部 第二九号 二〇一九年三月）。

(6) 『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『枕草子』、『宇治拾遺物語』には、いずれも不満ゆえの「爪弾き」が描かれる。『土佐日記』には、「日一日、風やまず。爪はじきして寝ぬ」（『土佐日記』一三九）と、一日中風がやまず、爪弾きをして寝てしまったようすが見られる。また、『蜻蛉日記』には、養女と逢いたいと願う右馬頭遠度（兼家の弟）が、沈黙する作者にいらだちを募らせ、爪弾きをするさまが、「爪はじきうちして、ものも言はで、しばしありて立ちぬ」（下巻（天延二年四月）一三三六）と描かれる。『枕草子』には、「爪はじきをしありくが、いとほしければ」（第八六段一七二）と、返歌のないことに気をもみ、ひそかに非難を表す爪弾きをする中宮職の役人が見られる。

『宇治拾遺物語』において「爪弾き」は、高貴な身分の姫君のもとに通い始めた大藏丞豊蔭と名のる色好みの男の話に描かれる。男の正体が藤原大臣家の若殿であることを、姫君の乳母と母は承知していたものの、父には知らせていなかった。そこに、女との噂の多い豊蔭なる男を通わせていることを聞きつけた父が娘の将来を案じ、母を責め立て爪弾きをし、憤懣を口にする。そのようすが、「いみじく腹立ちて、母をせため、爪弾きをして、いたくのためひければ」（巻第三

一四三）と描かれる。

(7) 日向一雅「落窪物語論—現実主義の文学意識—」（『源氏物語の王権と流離』新典社研究叢書三一 一九八九年一〇月）、三谷邦明「落窪物語の方法—読者と享受あるいは表現と構造—」（『物語文学の方法Ⅰ』有精堂 一九八九年三月）、土方洋一「いじめの構造—落窪物語論—」（『青山語文』第二〇号 一九九〇年三月）、畑恵里子「王朝継子物語と力—落窪物語からの視座—」（新典社研究叢書二二二 二〇一〇年一〇月）、石井香織「落窪物語」における飲酒表現—「酔ひ」の力学—」（『物語研究』第九号 二〇〇九年三月）、青島麻子「落窪物語」における婚儀—道頼と落窪の君の結婚を中心に—」（『国語と国文学』第九四巻第九号 二〇一七年九月）。『落窪物語』の笑いと涙に関しては、鈴木貴子「涙から読み解く源氏物語」（笠間書院 二〇一二年三月）。

(8) 糸井通浩・神尾暢子編『王朝物語のしぐさ』とことば（清文堂 二〇〇八年四月）に、「爪弾き（つまはじきす）」の項目がある。しぐさから物語を読もうとする早い試みとして評価できるが、個別の用例への詳細な検討はない。

(9) 西本香子「『老い』と対象喪失—『うづほ物語』三春高基の場合—」（『日本文学』第六八巻第五号 二〇一九年五月）は、妻に逃げられ、あて宮も手に入れることができずに破滅する三春高基の「老い」の生きがたさを論じている。

(10) 源正頼と民部卿（実正）の「爪弾き」は、それぞれ次のように描かれる。
おとど、爪弾きをして、「女子持ちたらむ人は、よき犬・乞丐なりけり。中に、「らうたし」と思ひし者をしも出だし立てて、かかる耳を聞くこと。なほ、犬鳥にも呉れて、籠め据ゑたらましものを」と言ひ、立ち給ひつるを、宮は、いとよく聞こし召す。
（蔵開・下—五九三）

源正頼は、藤壺が懐妊したので退出させようと思ひ、一族を連れて迎えに参内した。しかし、正頼の強引なやり方に機嫌を損ねた東宮は、藤壺の退出を許さない。嵯峨の院の小宮の下仕えや童が、娘である藤壺の悪口を言い合っているようすを耳にした正頼は爪弾きをし、いっそのこと犬や鳥に大事にもらった方がましだと、不快感を露わにするのである。

東宮は、正頼の発言を耳にすることとなる。愛情を大切にしている感情的な東宮の行為に、政治的な正頼が翻弄され、屈辱を受けるようすが、正頼の「爪弾き」に

も象徴されているのだといえる。

「さ言へども、はた、密か男といふ、訪はれためりかし。かう、忍び人設け給ふめる人をも、二つなく思し騒ぐ」とのたまふを、民部卿聞き給ひて、「いみじうは。これ聞き給へ」とて、つきしろひて、爪弾きをしておはさうず。

(国譲・上―六四五)

藤壺からの手紙に感涙する実忠の姿を見た宮の君は、東宮が藤壺だけを寵愛していることに皮肉を言う。民部卿(実正)は宮の君の心ない発言を耳にし、他の人物とつき合いをし、爪弾きをするのである。

(11) 雨夜の品定めにおいて式部丞が、風病の為にんにくを服用していた女の話をしたところ、君たちは作りごとだと言つて笑い、爪弾きをする。

「それごと」とて笑ひたまふ。「いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向かひるため。むくつけきこと」と爪はじきをして、言はむ方なしと式部をあはめ憎みて、

(帯木―一八八)

この場面では、「爪弾き」が攻撃的な「笑い」とともに描かれる。

(12) 空蟬の衣が「形見の衣」として光源氏の身边に置かれたことに関しては、倉田実『王朝の恋と別れ―言葉と物の情愛表現―』(森社社 二〇一四年一月)に詳しい。

(13) 女三の宮が柏木や朱雀院から受け取った手紙は、すべて光源氏とのトラブルの原因になっていた。神田龍身「女三の宮という不気味なるもの」(『平安朝物語文学とは何か―『竹取』『源氏』『狭衣』とエクリチュール―』MINERVA 歴史・文化ライブラリー 36 ミネルヴァ書房 二〇二〇年二月)は、女三の宮の文字コンプレックスに関して指摘している。

(14) 他にも、落窪の君を助けようとするあこぎに三郎君が協力したことを知った継母が、三郎君に走り寄り「うつ」さまが、「走りうちたまふ」(巻之一―一二二)と描かれる。ここに、継母の容赦ないありようが窺える。

また、怒りを込めたしぐさではないが、道頼と帯刀が中納言邸を訪れる際、道頼が親しみを込めて帯刀の背を軽く打つ場面が、「しとと打ちたまへば」(巻之一―三五)と描かれる。仲の良い二人の関係が象徴されている。

「うつ」に関連した表現に、露頭で四の君の婿を面白の駒と知った藏人の少将が、

「扇を叩きて」(巻之二―一六〇)と扇を叩いて笑いながら座を立つ場面がある。

また、「手を打つ」しぐさとしては、『伊勢物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『大鏡』にも一例ずつ見られる。『源氏物語』では亡き夕顔の乳母子である右近が、長谷寺で三条と再会する場面に描かれる。三条は手を打ち、嬉し泣きをするのであり、自分の低い女性のあからさまな喜びに用いられていることが窺える。

(15) 『夜の寝覚』、『狭衣物語』では、「爪弾き」の用例が一例ずつ見られる。『夜の寝覚』では、大納言が中の君と関係していたことを大君から聞いた左衛門督が爪弾きをするようすが、「目も口も一つになる心地して、爪弾きをはたはたとして」(巻二―一七五)と描かれる。「はたはた」と擬態語を用いて記述されることから、妹の裏切りにいらだつ左衛門督のようすが窺える。また、『狭衣物語』では、今姫君のもとに忍び入った宰相中将が、母代に見つかり大騒動となる場面に「爪はじきをしかくるさまの、いとおどろおどろしげなるに」(巻三―一七二)と描かれる。今姫君が自分から男を通わせたと思う母代は、今姫君を叱責し、爪弾きするのである。

ともに、誤解と関わる「爪弾き」の用例という点で共通している。誤解ゆえに攻撃性が強い分、誤解される女君の心の痛みも浮き彫りとなる。

**'Filliping' in the early tales of the Heian period:
centring on *The Tale of Ochikubo***

SUZUKI Takako

[Abstract] *The Tale of Ochikubo*, widely known as ill-treating of stepchild, shows stepmother's harsh and neglectful nature in her hand gesture. Two expressions such as 'momite' and 'tegarami' have in fact no other parallels than *The Tale of Ochikubo*. This has to do with the hand gesture of Lady Ochikubo in sewing delineated in the story.

What is often used expression with reference to the hand gesture is 'Filliping "tsumahajiki"'. 'Filliping' is defined as 'a movement made by bending the last joint of the finger against the thumb and suddenly releasing it' (COD), expressing such emotions as dissatisfaction, hatred, exclusion, etc. It is sometimes described as an amulet.

In the literature of the Heian period, *The Tale of Ochikubo* has 7 such examples as 'Filliping'; *The Tale of the Hollow Tree* 5; *The Tale of Genji* 4; *The Tosa Diary* 1; *The Gossamer Years Diary* 1; *The Pillow Book of Seishonagon* 1; *Wakefulness of Night* 1; *The Tale of Sagoromo* 1; *The Great Mirror* 1; and *A Collection of Tales from Uji* 1. This illustrates that 'Filliping' is more often used in *The Tale of Ochikubo* than the other works in the literature of the Heian period.

Preceding studies in *The Tale of Ochikubo* include such varied discussions as the one that has pointed out a penetrating realism; that has dealt with the structural study of bullying; that has focused on the importance of sewing by Lady Ochikubo; and that has turned attention to the expression of food and drink or the state of marriage. 'Filliping' among these discussions has been closely associated with the terminology of physical language. It is indeed an implicitly stated swearing and behind it lies aggression and insult directed towards one's target. Such subdued as well as subtle expression of character's inner voice has not been fully covered yet, although it needs to be treated with care.

My discussion in this paper centres on 'Filliping' in *The Tale of Ochikubo*. By way of comparing it with the early tales of the Heian period and *The Tale of Genji*, I hope to throw light on its own meaning characteristic of 'Filliping' in *The Tale of Ochikubo*.